

18世紀前期の人形浄瑠璃におけるカシラの流用 について

帝京大学 細田 明宏

人形浄瑠璃文楽で用いられる人形は、いくつかの部分品によって構成される。そのうち登場人物の人物像を表現する上で最も重要なのはカシラ（頭部）である。カシラは、顔面の造形によって数十の種類に分類され、それらは「娘」「文七」「孔明」などの種類名で呼称される。興行に際しては、登場人物に合わせたカシラがそれらのうちから選ばれて使用される。すなわちカシラは、様々な作品の登場人物に流用されるのである。

このように一つのカシラをさまざまな人物に流用することは、『浄瑠璃譜』の記事などから考えるに、18世紀前期に始まったようである。それまでは、新たな作品を上演するたびごとにカシラを製作していたと考えられている。そしてカシラの流用は必然的に、造形の類型化をもたらしたと考えられる。

従来、18世紀前期に始まったカシラの流用については、カシラそのものの問題として扱われることが多かった。しかしカシラの流用には、人形遣いがどのような演技をするかという問題も関わってくるはずである。なぜならば人形浄瑠璃で用いられる人形は、それ自体が何らかのものを表現する物体であると同時に、人形遣いの表現の媒体でもあるという二重性を有すると考えられるからである。

そこで現代の文楽人形遣いたちの言葉に耳を傾けると、「面より調子」、「娘のカシラはぼんやり作れ。魂はわしが入れる」、「名人は（人形でなくても）棒切れでもいい」などの発言を聞くことができる。これらの発言は、現代の文楽人形においては人形遣いの表現の媒体としての側面が強調されていることを示すといえるだろう。登場人物の人物像を表現するに際しては、人形遣いによる演技が中心的な役割を果たすのであり、人形自体は類型的な造形で十分なのである。

さて、カシラの流用が始まった18世紀前期は、人形浄瑠璃で用いられる人形についてさまざまな変化がみられた時代であった。三人遣い操法の創始はその代表的なものであろう。それらの変化は、義太夫節浄瑠璃の芸術論において登場人物の情（感情や心情）の表現を重視した新たな潮流が生まれたことを受け、人形操りにおいても情の表現が重視されるようになったことによるものであった（細田明宏 2011 「人形浄瑠璃における『情』の重視と三人遣い操法の成立」、『美学』第239号）。

つまり18世紀前期に人形浄瑠璃における人形は、人形遣いが情を的確に表現するための媒体としての性格を強めたのである。そのことによって人形遣いの表現が優位となり、人形の表現物としての側面は相対的に弱まることとなった。結果としてカシラの造形は類型的なものとなり、いろいろな役に流用されることになったと考えられるのである。